

氏名(本籍)	菊池春樹(茨城県)			
学位の種類	博士(ヒューマン・ケア科学)			
学位記番号	博甲第5857号			
学位授与年月日	平成23年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	思春期の自閉症スペクトラム障害の人を養育する家族のためのプログラムの開発 ～セクシャリティに焦点をあてて～			
主査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己	
副査	筑波大学准教授	教育学修士	飯田浩之	
副査	筑波大学准教授	博士(医学)	森田展彰	
副査	筑波大学講師	博士(医学)	太刀川弘和	

### 論文の内容の要旨

#### (目的)

思春期以降の自閉症スペクトラム障害(以下、ASDと略す)の人における性的な行動の問題は、教育現場や福祉現場において、適切な対応が望まれる重要な課題である。特に家族はASDの人の性的行動への対応にとまどいがちであり、よい関わりができないことが更に問題を悪化させる場合もある。本研究では、思春期のASDの人を養育する家族に対して、セクシャリティやこれに関する障害特性に配慮した理解や指導の方法を伝える内容のプログラムを開発し、これにより家族をエンパワメントする効果をもつことを確かめることを目的とした。こうしたプログラムにより、家族が思春期の子どもの発達や障害特性、セクシャリティについて前向きに理解することが、子どもと家族全体のQOL向上に寄与すると思われる。

#### (対象と方法)

プログラム開発にあたり、以下の3つの研究を実施した。

- 1) ASDの人の性的な行動の特徴をふまえた評価ツールを開発するための研究(研究1)
- 2) 思春期のASDの人を養育することに関する家族の困難について明らかにし、家族がASDの人のセクシャリティについて前向きにとらえられるようなプログラムを作成するための研究(研究2)
- 3) プログラムを用いた介入を行い、その有効性を検討するための研究(研究3)

研究1では、特別支援学校での調査と先行研究を参考に1)性教育、2)性的な行動、3)プライバシー、4)親の考えの4領域で測定する「ASD用性的行動チェックリスト」を作成した。同意の得られた96名の思春期の子どもを養育する親を回答者に本チェックリストを用いた質問紙調査を行い、信頼性と妥当性を検証した。欠損の多い1名を除外した95名の現在の診断を確認し、ASD群(N=40)、定型発達(Typical)群(N=29)、自閉症のない知的障害(MR)群(N=24)の3群(N=93、診断未確認2名)に分け、妥当性の検討を行った。

次に、研究2では、思春期のASDの人を養育することに関する家族の困難やそのために必要な支援について把握するため、特別支援学校においてアンケート調査を行った。調査結果と文献からの検討から、「思

春期の ASD の人を養育する家族のためのプログラム」を試作し、特別支援学校の PTA 研修においてその一部をデモンストレーションし、プログラムに関する意見を集めた。以上の調査結果を反映し、最終的なプログラムを作成した。

研究 3 では、プログラムの有効性を家族の自信、不安、子どもの行動の変化などをアウトカムとして検証した。申し込み順に、参加者を介入群と待機（対照）群に割り付け、プログラムの 1 週間前（Time1）とプログラム実施終了後の 4 週間経過後（Time2）、及び 12 週間経過後（Time3）の 3 回を測定地点とした交代介入の準実験デザインを使用した。

#### （結果）

研究 1 では、95 名の回答から、内部一貫性を指標に 59 項目のうち 40 項目を抽出、それをもとに 4 領域の下位尺度からなるチェックリストを作成し、良好な信頼性を確認した（「性教育（17 項目）、 $\alpha=0.91$ 」「性的な行動（11 項目） $\alpha=0.68$ 」「プライバシー（8 項目） $\alpha=0.90$ 」「親の考え（4 項目） $\alpha=0.70$ 」）。各下位尺度において、ASD 群が、有意に低得点を示したことで、対照群から区別できる弁別妥当性を確認し、最終的に「ASD 用性的行動チェックリスト」は 4 領域の下位尺度を構成する 40 項目と ASD に特徴的な項目を含めた総合的な情報収集を行う 10 項目からなる 50 項目となった。

研究 2 の特別支援学校における思春期の子育ての困難とそのために必要な支援について尋ねた調査に 94 名、試作したプログラムの一部を実施し、その内容について意見を求めた調査に 35 名の回答が得られた。両調査において、7 割を超える家族が、子どもの将来の結婚や性の目覚めに不安を感じ、特別支援学校に通う小学高学年以上の ASD の生徒の家族においては、95.8% が研修の場を望んでいた。それにも関わらず、2 つの調査共に 8 割を超える家族に、思春期をテーマとした研修の受講経験がなかった。特別支援学校における調査 94 名の家族のうち < GHQ-12 > 得点がカットオフの 4 点を上回っていたのは、61 名（64.9%）であった。プログラムの一部を実施し、その内容について尋ねた調査では、デモンストレーションしたプログラムのすべての内容について、8 割以上の家族から「適切である」と回答が得られた。また、望ましい回数として 3 回を選んだ家族が最も多かった。

実態調査において尋ねた「思春期の子育てについて、家族が困難と感じていること」は、「本人の成長に伴う家族全体のとまどい」、「将来や現在の問題行動に対する全体的な不安」、「具体的な本人の性についての不安」の 3 つのカテゴリーに分類された。

以上のような調査結果から、『思春期の ASD の人を養育する家族のためのプログラム』を、①「子どもと親の新しい関係性」、②「自閉症のある子の思春期・青年期」、③「子どもとセクシャリティについて話すこと」という 3 つのテーマで実施することとした。この 3 つのテーマは、1 部を週 1 回 2 時間で実施し、宿題を含め 3 週間で修了するワークブックを用いたグループワーク形式のプログラム 3 部で構成された。各回でロールプレイやディスカッションを用い、子どもとの関わりについての気づきを促す内容となった。

研究 3 では、このプログラムを実践し、その有効性を確かめた。前半介入群と待機後半介入群をあわせた 35 名のプログラム終了時のアンケート調査への回答から、「大いに満足している」を 100、「大いに不満」を 0 とした満足度について、平均 86.3 点（SD 19.0）の評価が得られた。

準実験デザインに従った有効性の検討として、介入群（N=19）と対照群（N=18）との比較を行った。各尺度得点を従属変数、介入の有無（介入群・対照群）と測定地点（Time1・Time2）を独立変数とする反復測定 の 2 元配置分散分析の結果、介入の有無と測定地点の交互作用に有意傾向の差が見られた尺度は、< ASD 用性的行動チェックリスト > の「子どもへの性教育」( $F(1,27) = 3.216, P = 0.084$ )；< GHQ-12 > ( $F(1,35) = 2.990, P = 0.093$ )、< ABC-J > の「不適切な言語」( $F(1,35) = 3.391, P = 0.074$ ) であった。

#### （考察）

思春期の ASD のセクシャリティに焦点をあてたプログラムを開発するにあたり、ASD の人が特徴的に示

性的な行動を量的に評価する必要があり、研究1では「ASD用性的行動チェックリスト」を作成した。その結果、40項目で4領域の下位尺度（性教育（17項目）性的な行動（11項目）、プライバシー（8項目）、親の考え（4項目））からなるチェックリストを作成し、良好な信頼性を確認した。この尺度では、ASDの人の性行動の頻度をチェックし、支援ニーズを評価できるものとなった。

研究2では、思春期のASDの人を養育することに上での家族の困難について調査で明らかにし、その実態をふまえた上で家族のためのプログラムを作成した。調査結果から、ASDの人に特徴的な性的な行動の存在が浮き彫りになり、周囲の人達とりわけ家族は多くの困難や今後の生活への不安を感じていることが明らかになった。家族の困難を分類すると、3つのカテゴリーに分類され、それぞれの困難に対応した、①思春期の親子関係についての心理教育、②ASDの子どもの問題に対処する戦略についての心理教育、③ASDとセクシャリティについての情報提供がプログラムの内容として準備された。

研究3において、プログラムの終了後、35名から得られたアンケートにおけるプログラムの満足度は高い値を示した。37名を分析対象とし、準実験デザインを用いた有効性の検討からは、家族の「精神医学的症状」の軽減と、「子どもへの性教育」の実施、子どもの「不適切な言語」の減少が示唆された。しかし、プログラムにおいて家族の推奨される養育スキルや子育てのストレス、子どもとの関係や子どもの行動に関する家族の肯定感、子どもの不適切な性的行動に関しては、改善が見られなかった。

以上のように、本研究は、ASDとセクシャリティ、および、ASDと家族支援といった、いまだ介入方法が確立されていない領域について、最初の指針として効果的なプログラムを提案した実践的な研究となったと考える。少なくともこの領域について、一緒に考える場を提供できたことは臨床的な成果と考える。また、これまで必要とされながらも、思春期のASDの人を養育する家族を対象とした支援が研究されてこなかった。そのための知見を提供できることは研究の意義として見出される。

今後、ASD、家族支援、セクシャリティの各領域での進展を視野に入れ、プログラム開発過程を再現しながら、多くの家族に対して、より有効なプログラムを実施することが望まれる。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

自閉性障害などの発達障害への支援が近年日本でも盛んになり、親の援助についても多くの指導書が出され、児童相談所のペアレントトレーニングが行われ始めている。しかし、学童以下の児童に関する青年期の問題行動特に性的な問題に対する親の対応については指導法は確立していない。

本研究では、まず自閉性障害の性的問題行動を評価する尺度を作成し、また性的行動への対応に関する親のニーズを明らかにしている。このうち評価尺度では、定型発達の児童や知的障害の児童と異なる自閉性障害に特有の行動傾向を見いだしている点が興味深く、自閉性障害に特徴に配慮した指導が必要であることを確認する結果となっている。また家族のニーズ調査からは、性的な行動そのもののみでなく、親として自閉性障害を持つ児童の成長や将来に関する不安や性について扱うことの戸惑いが、影響していることが示された。以上の結果をもとに親に対するプログラムは「親子の新しい関係性」「自閉症のある子の思春期・青年期」「子どもと性について話すこと」という内容のものとなった。こうしたプログラムの開発は、指導する問題行動の実態やそれを扱う親の意見を踏まえる手順をとっており、方法論的な妥当性を意識している点が評価できる。更に、できあがったプログラムを実際に行ってその効果を調べ、家族の「精神医学的症状」の軽減と、「子どもへの性教育」の実施の増加、子どもの「不適切な言語」の減少という効果があったことを確認している。調査事例が35事例とやや少なく、待機群を対照とした準実証的なデザインであるが、プログラムを通じて、家族が性行動への苦手意識を乗り越え積極的に関わる気持ちをもてるようになる効果を確認できたことは大きな成果である。一方、期待された養育スキルやその自信の向上、親子関係や子どもの性的行

動の改善が見られなかった。これは、プログラムが短期であり、あくまで全般的な対応の原則を伝える内容で、各事例の個別的な問題行動の分析や指導を行うものでないので、無理からぬ結果といえる。今後は、各事例における性的行動の評価や親の考え方に応じた個別的な指導を含むプログラムを検討してほしいところである。しかし、菊池氏の児童専門クリニックにおける臨床経験を生かして、取り扱いが難しいためこれまで十分にされてこなかった自性障害の性的行動に関する親への指導について、エビデンスのあるプログラムを開発したことは、この領域の分野において特筆される成果であるといえる。

以上、研究の意義、オリジナリティ、成果、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断される。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。